

English Garden 第93話

"I feel all the closer to Japan because I now am of 'mixed blood.'
Edwin O. Reischauer

「いま私は『混血』になったので、日本にいつそう親しみを感ずります」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの8回目です。この言葉は後にエドウィンが暴漢に襲われて重傷を負い、大量の輸血を受けたときのコメントです。

1963年7月、ライシャワー夫妻は東京勤務が2年を超えたので、休養のため8月末までアメリカで6週間の休暇を過ごしました。この間にワシントンでケネディ大統領に会い、1964年2月に大統領の訪日が決まりました。

ちょうど任期半ばとなったこの秋、氏はそれまでを回顧して、「着任のときから言っていた『パートナーシップ』という言葉も完全に定着し、アメリカがあまり日本の国内政治に関わらないようにすることができた」と語っています。彼自身も舞台上で演技しているような過剰な自意識が消え、ワシントンが望めば現職に留まりたいと思うようになりました。

1963年11月23日、テルスター衛星を使った最初の日米テレビ中継が行われることになり、ライシャワー夫妻はその番組に午前8時から出演する予定でした。ところが、未明の電話で知らされたのは、ケネディ大統領暗殺のニュースでした。その日はちょうど経済委員会のために来日する閣僚を迎える準備を整えていたところでしたが、代表団は飛行機でハワイを発った直後にその知らせを受け、急遽ワシントンに引き返しました。

ケネディ大統領を深く敬愛していた夫妻は大きな衝撃を受けました。ケネディに親しみを持っていた多くの日本国民も動揺しました。そこで大使は直ちに日本国民に向けて、「アメリカの政策は不変であり、ジョンソン大統領のもとで世界平和に向けて前進を続けていくであろう」という内容のメッセージを、英語と日本語で繰り返し放送しました。

ワシントンで行われた葬儀には池田首相が列席し、翌日東京の教会では追悼のミサが行われました。日本国民からも哀悼の手紙や千羽鶴などがたくさん寄せられました。12月27日には日比谷公会堂でケネディ大統領を偲ぶ集会在催され、2300人が集まりました。大使館は1ヵ月の喪に服し、クリスマスの行事もほとんど取りやめになったそうです。

1964年3月、また大きな事件が起こりました。エドウィンが暴漢に太腿を刺されて重傷を負ったのです。直ちに虎ノ門病院で4時間に及ぶ手術を受け、日本人の血液もたくさん輸血されました。その際ユーモア溢れる表題のようなコメントを返し、これを聞いた日本国民は安堵して大使にいつそうの親しみを感ずりました。

犯人は精神に障害のある19歳の青年で、「心身耗弱」のため刑期は短く、氏の帰国前に釈放されました。これに関して氏は、「日本では精神に障害のある人物の処遇がいろいろ論議されているが、こうした人物が100万近くもいると言われる状況は実に恐ろしい」と日記に書いています。40年近くも前のものとは思えない言葉です。

その後、心配された後遺症の血清肝炎が発症、日本の病院とハワイで数ヵ月の療養生活を送りました。7月にハワイから戻ったエドウィンは執務を再開しましたが、それからは警備が厳しくなり、楽しみだった皇居までの朝の散歩も遠慮するようになりました。

日米間にも厄介な問題が続発しました。原子力潜水艦の寄港をめぐる調整、アメリカの東南アジア政策に対する反対、利子平衡税や北洋漁業をめぐる反米運動などに加え、ライシャワー氏の発言に対する進歩的文化人や共産系出版物の個人攻撃もありました。ハルはうつ状態となり、もう大使を辞めてほしいと自ら言いましたが、エドウィンは、日米関係の発展のために、アメリカに対する衝撃の一部を引き受けるのも大使の役目だと言ってなだめました。彼自身の体調も完全ではなかったのですが、刺傷事件について日本国民が責任を感じすぎないよう、あと1年は職にとどまる決意をしていたのです。

しかし、1965年になるとベトナム戦争に対する日本人の抗議が強くなり、デモ隊が大使館に押しかけてくるようになりました。平和を訴える各界の指導者たち(大使の旧友である元東大総長茅誠司氏らの7人委員会など)も、ジョンソン大統領への抗議文を持って次々と来訪しました。エドウィンは最初からアメリカのベトナム介入には反対でしたが、情勢がここまで進んでは、武力による解決以外に道はないと、アメリカの政策を受け入れる気持ちになっていました。でも、ようやく改善されてきた日本国民の対米感情が、ベトナム戦争でふたたび悪化するのを見るのはつらいことでした。それに、日米の「イコール・パートナーシップ」の関係も築かれたので、もう役目は終わった、辞任の時が近づいたと、彼自身も感じるようになりました。

(次回に続く)

参考文献:

- "My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York
- 『ライシャワー自伝』エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987
- 『ライシャワー大使日録』エドウィン・O・ライシャワー／ハル・ライシャワー著、入江昭監修、講談社、1995年